

特集「はかる」について

小川 國治

東亜大学 総合人間・文化学部 文化文明史研究室

E-mail:ogawa@toua-u.ac.jp

今年度は昨年「からだ」に続いて「はかる」について特集した。「はかる」には、計る、測る、量る、図る、謀る、諮る（『広辞苑』）など、多様な意味が包摂されている。我が総合人間・文化学部には人間学、心理学、スポーツ学、健康科学、文化文明史の5研究室があり、その基礎として情報教育が行われている。「総合人間・文化」が示すように、これらの研究室には多彩な若い人材が集っており、幸いにして本特集にも優れた論考が寄せられた。

人間学研究室の論文「動物考古学における計測の利用と解釈——出土ウマ（Equus caballus）の推定体高値の遺跡差——」は、日本の中世では馬を用途に応じて改良したと言われているが、これまで実証的な研究が存在しないことを指摘し、日本各地の遺構で出土した馬の骨の計測データをもとに、地域の特性や遺跡の性格と馬のサイズとの関係を考究している。

心理学研究室の論文「ここを測ること——アンケート調査技法を用いた心理学的測定について——」は、心理学領域で行われる重要な研究手法である調査技法について、三つの観点からまとめている。その一はここを測る方法としての調査技法の重要性と留意すべき問題点、二は他の心理学的研究技法との比較、長所と短所についての観点、三は社会的貢献に調査がどのような場面で役立つかの観点である。これらをもとに学生が就職後に直面する調査の技法についても論及している。

スポーツ学・健康科学研究室の論文「健康・

スポーツ科学における「はかる」ことの意義——測定評価・統計リテラシー教育のススメ——」は、情報（データ）が氾濫し、その真偽の判断が困難な現代社会において、スポーツ学・健康科学の分野における「はかる」ことの意義を明らかにし、情報（データ）の本質を見抜く力の必要性を提案している。

文化文明史研究室の論文「学生はアジアをどう見ているのか——中国・アジアに対する感情を量る——」は、昨年4月に中国で反日運動が起こり、これに触発されて日本でも嫌中感情が広がった問題を指摘し、それを量る一つの方法としてアンケートを分析することを提案している。そのうえで、当大学の学生に実施したアンケートをもとに、学生たちが中国や他のアジア諸国に対してどのような感情を抱いているかを分析している。このアンケートとの結果と諸マスコミにおけるアンケートとの結果を比較するとともに、さらに他の著作やインターネットにおける中国人の日本人に対する感情の調査を紹介し、反日運動前後と現在の感情の変化についても言及している。

以上は特集に寄せられた4論文を著者の意向に沿って一部を紹介したに過ぎない。後掲の各論文で詳細に述べられているので検証を願いたい。この特集が「はかる」について新しい分野を切り開いてくれることを期待して。